第一部　国語

注意　1　問題は、一から四までであり、四ページまで印刷してあります。
2　答えは、すべて別紙の解答用紙に記入し、解答用紙だけ提出しなさい。
3　問いのうち、「……選びなさい。」と示されているものについては、1、2、3、……の記号で答えなさい。

一

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

川のほとりで、いつか朝の気配がはじまりました。緑色のペンキを塗ったベンチに腰かけて、(そうぼくはくたびれきっていた！)だんだん夜がしりぞいてゆくのを見ていました。そして明るいねずみ色の朝がきました。川の水の上には、かもめやわらくずやよごれたものがしずかにながれておりました。

一年が、次の一年にかわる日がなぜこんな冬に用意されているのだろうかとぼくはその景色に問いました。すると景色はこたえました。――たとえばそれを春に、ひとつの花の咲く日にかわるのだときめてごらん。花は、気候や雨や風や太陽のために、自分のおもう日には咲くことはできない、しかし人はその花をたのみに一年をとりかえようとする。そうしたら、その花は自分に負わせられているつとめの重さのためにどうするだろう！考えただけでもそれはあまりにもむごいことではないか。では、それを夏に、あの緑とはげしい光と影の季節に年が［　　］。あまりにも意欲にみちたとき、そしてあまりにも恵みにあふれたとき、どうして人が古い年として、それを捨ててあたらしい年といい得るものを見つけられるだろうか、秋にみのる穀物たちは、そうしたら、だれのものになるだろうか。ではそれを秋に、ひとつのこずえから葉が母なる土に落ちてゆく日にかわるのだときめてごらん。その葉がしずかに舞い落ちてゆく、光はうららかにさびしい、そのとき、人は知っている、その次に何がくるかを、人の心はただ期待にかきたてられておののく。どうしてそんなときに次にくるものをあたらしい年とせずにいられようか、それで冬を選んだのだ、おまえは、今あまりにもあらわな冬景色のなかで、そのさびしさにだけ触れたからあやしんだ、だが、よく考えてみてごらん。冬はほんとうに冬は、そこで一年が、次の一年にかわるという大切な出来事に耐えるたったひとつのおおしい美しい季節なのだ。と。……ぼくはその景色のことばを考えながら、そのベンチから立ちあがり一晩じゅう空っぽにしておいた、自分の部屋にかえり、ベッドにもぐりこみました。そして長く眠りました。

眼をさましたとき、ぼくは、二十四歳の青年になっていました。あたらしい日々がはじまっている。あたらしい変化がしずかに燃えはじめた。

問一　［　　］に当てはまる最も適当なものを文中から十五字以内で書き抜きなさい。

問二　――線「それはあまりにもむごいことではないか。」とありますが、一年が次の一年にかわる日をひとつの花の咲く日にきめることがどうしてむごいことになるのですか、八十字以内にまとめて書きなさい。

問三　景色の話を聞いて新年を迎え、二十四歳の青年になったぼくについての説明として、最も適当なものを次から選びなさい。

1　冬が自分に試練を課しているのは、春の活動に備えるためであることを知り、これまで生きることの苦しさから逃れようとしていたぼくは、新年を迎えこれからは冬のようにつよく生きていこうと心を新たにしている。

2　冬がいま、来るべき大切な出来事に耐えるために静かに休息しているのだということを知り、くたびれきっていたぼくは、この静かな自然のふところに抱かれてぐっすり眠り、さっぱりした気持ちで新年を迎えている。

3　これまで冬のきびしさをきらっていたぼくは、四季にはその折々の趣があるように人生にもその時々にふさわしい生き方があることを知り、新年を迎えてかけがえのない青年期を冬のようにきびしく生きようと心に誓っている。

4　新しいものを生み出す力を蓄えている冬が、次の一年にかわる日を定めるのに最もふさわしい季節であることを知り、くたびれきって冬にさびしさだけを感じていたぼくの心にも、新年を迎え新たな意欲がわきはじめている。

5　冬の美しさはそのそぼくで男性的なたたずまいにあることを知り、これまで自分をいつわりうわべだけを飾ろうとしてきたぼくは、新年を迎えこれからは冬のようにたくましく誠実に生きていこうと自覚しはじめている。

二

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

九月の日曜日、少年は河口の堤防から海へむけて新品[1]の竿をふった。自慢のリールが軽い音をたてて回転し、竿が初秋の青空へしなやかな弧を描いた。釣り糸の先端のおもりとえさのついた針がわずかにもつれながら海上へ飛んだが、あまりうまくは投げられなかった。それでも少年は、自分ひとりの力と技量で、空と海を征服したような気分だった。

潮が満ちてくると小さなハゼがかかった。二倍も三倍も大きい魚に竿先がしなうようだった。少年は三匹釣り、友人も仲よく三匹釣りあげた。

突堤には子供づれの父親が多かったが、少年はそのことが少しも気にはならなかった。おとなたちも同じような釣果で、初秋の陽をあびながら浮子を見ているだけで満足そうな顔をしていた。子供が走りまわるとしかりつけ、もうすぐ帰るといいながら、また糸をたれ、たばこに火をつけた。[1]

釣れなくなると、浮子はぴくりともしなかった。川上から流れてくるごみが、浮子にふれてとどまり、少年が竿先を少しひくと、またゆっくりと水面を流れだした。無人の砂浜には脱衣小屋の解体作業をしている人夫が、声をかけあって働いていた。

——釣れたかい？

ふいに声をかけられて、少年はふりむいた。すぐうしろに父がいて、魚籠をのぞきこみ、少年の顔を見た。

——うん、三匹ね、少年はいったが、声がふるえているようで恥ずかしかった。

——元気そうだな。

——……。

——いい釣り竿をもっているな、新品だね。

少年は息をとめて大きくこっくりをした。さっきからずっと、父親に見つめられていたような気がしていたのだ。

久しぶりに見る父は、陽やけして元気そうだった。少年は父が家に帰って、母親から自分のことを聞き、それでここへきたのかとたずねたかったが、父が鞄をさげていたので黙った。父親から眼をそらし、浮子を見つめていた。すぐ隣にいる父が、やはり浮子を見ているのがわかった。

赤い浮子は［　　］いつまでも静止していた。[2]

——さっきは釣れたのに、と少年はいいわけをした。

——どれ、貸してごらん。

釣り竿をわたすとき、父親の手に触れたので、少年はあわてて手をひっこめた。父親が気づかぬふうを装っているのが少年にはわかった。[3]

——これじゃあ、釣れないさ。

父親はえさのつけぐあいを見ていったが、柔和な顔を崩さなかった。父親は竿を巧みにあやつって、少年よりもはるか遠くへ投げた。しかし、浮子が動くとあわてて竿をあげようとした。[3]

——風で浮子が動いただけだよ、と少年は非難するようにいった。[4]

竿が父親と少年の手を幾度か往復した。さざ波がたって、浮子が絶えず揺れ動いた。[5]

——そら、かかった！

突然、父親がリールをまきはじめた。竿先が大きくしない、ぴんと緊張した糸が、一直線に水面に近づいてきた。父親が魚を釣りあげるのはもうすぐだ。しかし、水面から現れた釣り針には、黒い石のようなものがかじりついていた。それは、空たかく釣りあげられ、二人の顔のまえにきた。黒ずんだぶかっこうな貝だった。[5]

——ばかな貝だなあ。

二人は同時にいい、顔を見あわせて、声をあげて笑った。少年は、愚かな貝とそんなものを釣りあげた父を笑いながら、自分がすっかりおとなになっている気がした。

やがて、二人は、橋のうえで別れた。うちへ帰らないの？　と少年は聞かなかった。父親も、少年の肩に手をおいただけだった。その父は少年にはもう見知らぬ男の人に見えた。

少年はふりむかずに、竿をにぎりしめ、魚籠をさげて、夕暮れの道をぐんぐん歩いた。[2]

問一　——線1、2、3、4、5の読みをひらがなで書きなさい。

問二 □に当てはまるものとして、最も適当なものを次から選びなさい。

1 秋の夜空にかがやく星のように　2 水草にかかったささ舟のように　3 水面に射こまれた吹き矢のように
4 小春日の白壁に止まったはえのように　5 水面に顔を出している小岩のように

問三 ‖線1「そのこと」とはどのようなことですか、最も適当なものを次から選びなさい。

1 父親がつりに熱中して、突堤で遊んでいる子供たちのことをつい忘れがちになっていること
2 潮は満ちてきたけれど、友人と同じように小さなハゼがわずか三匹しかつれないでいること
3 父親に注意されたことも忘れたかのように、突堤で子供たちが勢いよく走りまわっていること
4 突堤に子供づれの父親などが大勢いるので、静かにつりを楽しむことができないでいること
5 初秋の陽をあびて、突堤で大勢の父親と子供たちが仲良くつりなどをして楽しんでいること

問四 〰〰線1、2、3、4、5の中で、父親に対する少年の複雑で微妙な気持ちが最もよく表されているものを選びなさい。

問五 ‖線2「少年はふりむかずに、……夕暮れの道をぐんぐん歩いた。」とありますが、この少年の心情を説明したものとして、最も適当なものを次から選びなさい。

1 いつもは考えてはいけないことだとして、忘れようと努めていた父への思いが、偶然父と魚つりをしてその暖かい心にふれ、それがおさえがたいものになっていく自分の心の弱さにいらだっている。
2 新しい竿の調子や久しぶりの釣果にほぼ満足し、途中で仲間に加わった父が黒ずんだ貝しかつることができなかったことなど、突堤での楽しかったつりのようすを一刻も早く母親に知らせようとしている。
3 仕事でまた旅に出る父が、出発を前に自分のために楽しい魚つりにしようとしていることを知りながら、留守中のさびしさを思い、自分がそんな父親に対し素直に応じられなかったことをすまなく思っている。
4 魚つりをともにし、自分のために何かと気をつかってくれる父ではあるが、おそらくこれからも家にはもどってこないと思われる父親のことはもう考えないで、自分で強く生きていこうとしている。
5 仕事で家を留守にしがちな父と魚つりをして、父が家族のことを心から心配し、別れのさびしさも決して表面に出すまいとしていることがわかり、父親にこれ以上の心配をかけてはいけないと思っている。

三

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

人間の営みあへるわざを見るに、春の日に雪仏を作りて、そのために金銀珠玉のかざりを営み、堂をたてんとするに似たり。その構へを待ちて、よく安置してんや。人の命ありと見るほども、下より消ゆること、雪のごとくなるうちに、営み待つことはなはだ多し。

注　営みあへるわざ――お互いに努力してやっている仕事　雪仏――雪でつくった仏の像　構へ――できあがり
営み待つこと――せっせと努力して、できあがるのをあてにしていること

問一 ――線「似たり」の主語に当たるものとして、最も適当なものを次から選びなさい。

1 人間　2 わざ　3 雪仏　4 かざり　5 堂

問二 〰〰線「よく安置してんや。」の意味として、最も適当なものを次から選びなさい。

1 雪仏を安置することができようか、できない。　2 雪仏を安置することは非常に難しいだろう。
3 雪仏を安置することは大変すばらしいことだ。　4 雪仏を安置するにはどうしたらよいだろうか。
5 雪仏をなんとかしてじょうずに安置してほしい。

問三 この文章で作者はどのようなことを表そうとしていますか、最も適当なものを次から選びなさい。

1 人間の欲望は限りなく、しばしばあやまちのもとになるものである。
2 人間の創造力は偉大であり、その芸術はすばらしいものである。
3 人間の夢は大きく、時には人々の生活を豊かにするものである。
4 人間の心は弱く、だれもが仏にすがる気持ちをもっているものである。
5 人間の命ははかなく、その一生は非常にむなしいものである。

問四 この文章は、「徒然草」からとったものですが、この作品の作者名と書かれた時代を次のA群、B群からそれぞれ選びなさい。

A群　1 紀貫之　2 吉田兼好　3 鴨長明　4 紫式部　5 松尾芭蕉
B群　1 奈良時代　2 平安時代　3 鎌倉時代　4 江戸時代　5 明治時代

四

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

いじけた並木を梅雨のぬらす日々がやってきた。早苗をわたる風の涼しさには無縁の街の住人たちも、衣がえの感触に季節のうつりかわりを知らされる。

人々の暮らしのめどとなる時間の単位も、むかしとはずいぶん違ってきた。かつては春夏秋冬の節季が農作業の一区切りだったし、江戸の町人たちは二時間ごとの寺の鐘にあわせて生活した。それで格別のふつごうはなかった。

戦前の少年雑誌に読者からの投稿をのせる、こっけい和歌、という欄があった。そこに「腕時計買ってもらったうれしさにころんだ時も何時何分」というのがあった。いまならこれを「何秒いくつ」に変えねばなるまい。

流行のデジタル時計では、いまの一瞬の時刻が数字でパッと表示される。これも、秒単位の生き方をしなければならぬ人々の多い時代のはんえいだろう。

秒進分歩、複雑になる一方の社会の仕組みのなかで、だれもがまるで時間におわれるようにして忙しく走りまわっている。それもある程度はやむを得ないことかもしれない。だが、いつもストップウオッチを片手にしているような生活を続けていると、目先のことだけにとらわれて、長期的な展望ができなくなるおそれがある。過去から未来に続く時の流れというものが理解しにくくなる。

戦後のわずか三十年ほどの間に、日本の自然をここまで破壊した遠因も、実はこのへんにあったとはいえないだろうか。鎮守の森を切り倒して工場や高速道路をつくったとき、われわれはかけがえのない時間の堆積を売りとばしていたのではないか。

「デジタル時代だから、子どもに時計の見方を教えるのはむだじゃないかしら。」と、先生にねじこんだ母親があるという。しかし、時間がとどまることなく流れ続けている、という事実を子どもに分からせるには、文字盤をまわる針にまさるものはあるまい。

風景からも食卓からも季節が失われた街に、きのうやあすのことを考えるよりただきょうの刹那に生きようとする人々があふれている。その人々のめまぐるしい営みのあとに、桑田の変じた滄海が残される。われわれに今いちばん必要なのは、何十年後、何世紀後を考える知恵ではないか。

地球上のどこにでもあっという間に飛んでいける、そんな時代を迎えて、人類はついに時間を支配したとおごってはいけない。時間を使っていると思いこんでいたら、実は時間にこき使われていたということになってはならない。それは、機械と人間とのかんけいによく似ているのである。

注　桑田――桑畑　滄海――あおあおとした海

問一　――線1、2、3、4、5を漢字になおしなさい。

問二　═══線「無縁」と同じような結びつき方でできていることばを次から一つ選びなさい。

1　非常　2　禁止　3　再会　4　公私　5　国鉄

問三　〰〰線「デジタル時代だから……むだじゃないかしら。」と、……母親がある」とありますが、この部分を「先生」を主語、「ある」を述語とする文に書き改めなさい。

問四　この文章で作者はどのようなことが大切だといっていますか、最も適当なものを次から選びなさい。

1　変化してやまない現代社会においては、時間がとどまることなく過ぎ去るものであることをわきまえ、常に秒単位の生活ができるようにすることが大切である。

2　いつも時間におわれている現代社会においては、目先のことだけにとらわれて貴重なものを失うことがないように、まず社会の仕組みを変えていくことが大切である。

3　しばしば人間が機械に使われる現代社会においては、秒単位の生活もやむを得ないが、静かに季節のうつりかわりを味わう心のゆとりをもつことが大切である。

4　刻一刻と複雑化していく現代社会においては、時間におわれる生活もある程度はやむを得ないが、未来を見通したものの見方や考え方をすることが大切である。

5　常に秒単位の生活を強いられている現代社会においては、きのうやあすのことを考えるよりも、まず第一に現在の一瞬一瞬の生き方を考えていくことが大切である。